「生きがい」に満ちた働き方

下山の時代の仕事術

第7回 特別編

「平田オリザ×藻谷浩介」対談 後編

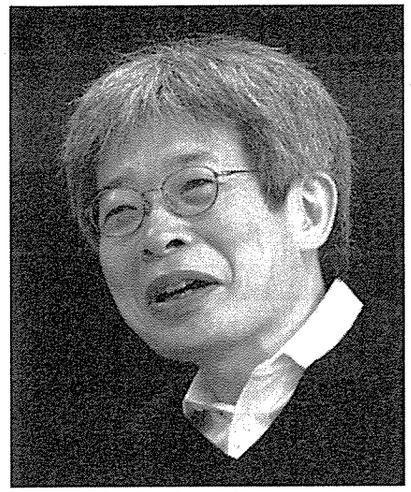
神山典士

下り列車の先に未来がある

～積極的低収入層の登場

撮影＝北村崇

ともに「経済成長なきこの国の未来」をユニークな視点から論じている平田オリザ氏と藻谷浩介氏。二人の対談現場には、同様にこの国の未来のあり方に疑問や関心を持つ人々が集まった。その一人で『減速して自由に生きる ダウンシフターズ』（ちくま文庫）の著者、高坂勝氏の実践も交えながら、経済システムに絡め取られない生き方について考えを進めた。



平田オリザ～演劇人ではあるが、コミュニケーション教育や文化アドバイザーなどで全国を駆け回る

平田　経済成長のことを考えるとき、格好な事例と出合いました。この前、家電量販店に行ったら、テレビ売り場で50インチのテレビが20万円を切っていた。かつては1インチ1万円といわれていたのに随分値崩れしている。その隣では4Kのテレビが200万円で売られています。この状況で4Kを買う人はよほど変人だなと思ったんです。

藻谷　それは個人旅行でも「自分はファーストクラスに乗る」みたいな人ですね（笑）。

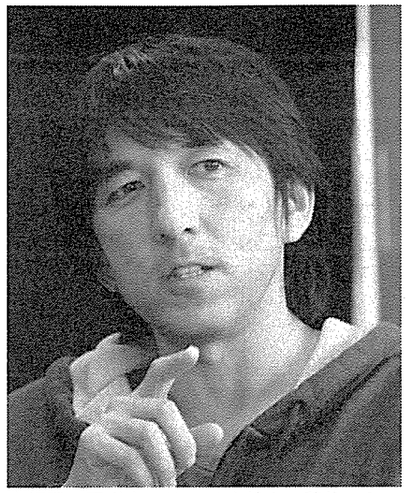
平田　どう見ても数年後には4Kも値崩れするとわかる状況なのに、いま200万円を誰が払うのだろうか？　だって50インチのテレビでも十分に高級感がありますから。これこそが「デフレの正体」だなと思いました。ぼくは以前からシャープの液晶テレビの「亀山モデル」にも着目してきました。シャープは、あの技術は中国や東南アジアでは造れないと言い張っていた。本当はデジタルになればなるほどまねしやすくなるのに。一番まねできないのが真空管テレビなんだそうです。職人技なので。液晶テレビは見事に中国や東南アジアの企業でも量産されて、それもあってシャープは経営が立ち行かなくなった。ぼくが籍を置く大阪大学でもナノテクノロジー技術の発展がすごくて、携帯電話やパソコンが1カ月充電しなくてもいいような技術が生まれています。そうなるとバッテリーは劣化しないし、廃棄も少なくなる。

そういう状況を見ていけば、どんなにイノベーションしても、他国にまねされて安く輸入されたり、書籍のように無料のネット媒体に食われたり、数字で測るGDPは上がらないことになります。経済すべてがこんなにわかりやすい縮小方向の状況なのに、なぜかいまでも「経済成長幻想」から抜けきれない人がいる。それが不思議なんです。

藻谷　彼らは「日本もイノベーションできればまだまだ成長する」なんて語る。ばかにするな

ひらた・おりざ　1962年、東京生まれ。劇作家演出家。劇団「青年団」主宰。95年「東京ノート」で岸田戯曲賞受賞。2002年「その河をこえて、五月」で朝日舞台芸術賞グランプリ受賞。演劇的手法を駆使したコミュニケーション教育などを各地で展開している。大阪大COデザインセンター特任教授、東京藝術大特任教授。著書に『下り坂をそろそろと下る』『幕が上がる』など多数

藻谷浩介～少年時代から全国の人口動向を調べるのが趣味だった。全国全世界を訪ね歩く日々



髙坂勝～匝瑳市ではNPOを持ち、移住コミュニティーをつくっている。大企業のビジネスマンが田植えをする

と言いたい。カラー液晶から高感度タッチフィルムまで、スマホは日本の新技術の粋です。けれどそれがすぐに世界に波及して値崩れが始まるので、インフレになりません。日本の起こすイノベーションは、際限なく値崩れするハードと、ネット上の無料ソフトを増やして、デフレを助長しています。

平田　イノベーションの競争が難しいもう一つの要因は、日本では短期記憶を競う教育になっていることです。記憶量のピークは高校3年生で、受験では学力ではなく従順さと根性が試されてきた。最近の脳科学でわかってきたのは、イノベーションのような新しい発想は長期記憶の組み合わせからしか生まれない。複雑な経験を一遍にさせたほうが長期記憶につながるそうです。日本の教育はそこを刺激しないので、イノベーション力も他国からは劣ると言われています。

確かに高度成長の時代には、従順で根性のある産業戦士が大量に必要だったのでそういう教育も国益にかなったわけですが、いまはそんな優秀な戦士は中国か東南アジアに10億人単位でいる。いつまでもそのような教育をしていたら、大量の失業者を出してしまいます。

藻谷　日本社会の同調圧力に、受験や就職を通じて過剰適応した若者たちを、異文化の中で闘う場に引っ張り出さないといけないでしょうね。ですが若者は、地方都市でも都会でもスマホとにらめっこの画一化した生活をしています。大企業システムの提供してくれるコンビニやファミレスやユーチューブ程度の多様性で満足し、画像を消費し、仲間うちの相対的な関係の中に身を置くことで安心する。

平田　地方でも一部の町では複合的な本物体験ができています。ぼくは一昨日、岡山県奈義町にいて、映画「幕が上がる」の上映をして、主演している「ももいろクローバーZ」のメンバーにも2人来てもらったんです。全国からファンが集まる大騒ぎになりましたが、代理店とかを通さずに全て役場職員で仕切って、午後は子どもたちと一緒に子ども歌舞伎を体験してもらった。1学年50人しかいない町なので、ほぼ全員がももクロと触れ合える。そういう本物体験ができるのは小さな地方都市だからこそですね。

都会では「消費者」になるしかない

――ここで髙坂勝さんをご紹介させてください。自らギアを下げて生きる「ダウンシフターズ」を提唱されて、週に4日、都心でバーを開け、3日間は千葉の匝瑳（そうさ）市でお米の自給などにいそしむ二地域居住をしていらっしゃいます。

髙坂　お話を聞いていて、店に来る農機具メーカーの営業マンのお客様を思い出しました。農業人口は毎年10％減っているのに売り上げは10％伸ばせと言われる、どう考えても無理だと言っていました。ぼくはこの時代には成長よりも持続可能性や循環を考えるべきじゃないかと思って、バーでは絶対に儲（もう）けないことをポリシーにしています。メニューで人気になったものは（メニューから）下ろす。肉を出さずにオーガニックな野菜だけにする。ところがそうしていくと、同じ指向性のお客さんが逆に増えていく。

もたに・こうすけ　1964年、山口県生まれ。日本総合研究所主席研究員。平成の大合併前の3200市町村のすべて、海外82カ国を自費で訪問し、地域特性を多面的に把握。地域振興や人口成熟問題に関し精力的に研究、執筆、講演を行う。著書『デフレの正体』で生産年齢人口という言葉を社会に定着させ、社会に人口動態の影響を認知させた。近著に『日本の大問題』（養老孟司氏との共著）など

小さな生業（なりわい）というのはお客さんの層を絞った方がリピート客が増えますね。

あとの3日間は、匝瑳の田んぼで都会からやってくる75組の人たちに稲の育て方を教えています。移住してくる人も多くて、家や農地を紹介したりもします。食べ物は自分で育てているし、地元の方々との物々交換もある。コミュニティーで生きている実感があります。店のお客さんの中には全国各地に移住した人もいるので、地方への移住希望者にはどんどん紹介もします。これからは東京の人口を少しでも地方に分散させることが大切だと思っているので、そのきっかけになればと思っています。

平田　兵庫県豊岡市の市長も「下り列車の先に未来がある」と言っています。これまで人材は全て上り列車に乗って都会に向かっていましたが、これからは逆になっていきますね。演劇界でも、東京では若い劇団員は食っていけないので、豊岡市の城崎（きのさき）や奈義町にレジデンス（滞在型）施設を造って、援農と組み合わせて稽古（けいこ）ができる環境を作ろうといったアイデアを進めています。劇団が完全に地方に移住する必要はないけれど、農業を手伝いながら稽古ができればいい。

髙坂　不思議なのは、山奥の誰も来ないような場所のカフェでも暮らせるだけの稼ぎになるんです。基本的に家賃がかからない。家賃1万円の古民家で整体師をやっている人も、客が1日2人あれば20日間稼働で20万円になる。空いた時間で米と野菜も作って、面白いことをしているNPOを手伝ったりして、充実した生活を送っていますよ。

藻谷　完全失業率を比較すると、東京は3・6、北海道も3・4。ところが島根は2・8、和歌山は2・6、福井に至っては1・8と地方の方が低いんです。過去の常識とは真逆で、地方のほうが人手が足りず、仕事があるのです。

髙坂　島根県では30代の女性の移住が増えています。その3、4割は何らかの起業をしていて、夫婦で月に5万円程度の仕事を四つか五つ持っているケースが増えている。そういう人たちは地方の都市部ではなく限界集落のような地域に住むのですが、それでも自分たちの望む豊かな生活は可能なんですね。

平田　町で窯焼きピザ付きのおしゃれなイタリアンレストランを誘致するようなところも出てきています。地方にはおいしいパン屋、スイーツ、カフェなどがどんどん増えている。そういう店がやってくると地元素材を開拓してくれるし、若い女性が集まって好循環が生まれます。

藻谷　髙坂さんは著書『次の時代を、先に生きる。』の中で、年収は300万円台と書いていますが、都心で物件を借りていても、田舎にも拠点を持っているので大丈夫なのですよね？

髙坂　地方生活では年収は確かに都市生活者の半分以下です。でも都会では一つの仕事しかできないので、他のことはお金に依存しないといけない。そこから「ザ・消費者」が生まれて、経済システムに絡め取られてしまう。でも地方では150万円くらい稼げたら自由に生きていける暮らしがあるんです。ぼくは「積極的低収入層」と呼びたいのですが、都会のように高収入は目指さなくても、時間が増える、コミュニティーがある、自然がある、子どもを悠々と育てられる。そういう選択をする層が確実に増えている。有機農業をやっている友人夫婦は、年収200万円もないはずなのに子ども3人を大学卒業させている。そういう生き方が可能な下り坂の時代になりました。

高齢者と「認知症徘徊演劇」を結成

平田　元気な地方には面白い人がたくさん現れています。たとえば岡山にはうちの劇団青年団の所属で介護と演劇を結びつけて活動している菅原直樹君がいます。

藻谷　いやあ、それは狙い目ですね。その分野は成長産業化が間違いないですね。

平田　そもそも認知症と演劇に関しては、東北大学の藤井昌彦先生が治療や介護に全面的に演劇を取り入れる「演劇情動療法」を実践されています。脳の中で計算とか記憶をつかさどる大脳新皮質が衰えてくると認知症になる。ところがそうなっても、情動をつかさどる大脳辺縁系は全く衰えていない。脳は一つの機能が衰えると他がカバーしようとするので、認知症の人は情動が刺激されて怒りっぽくなっているけれど、その分、喜ぶ力も増えている。つまり認知症のおばあちゃんがお財布を開いて「あ、1万円札がない、あなた盗んだでしょう」と言ったときに、「いや盗んでいませんよ、あそこに置き忘れたんじゃないの？」と新皮質系で説明すると対立する。藤井先生のところでは、介護従事者が演劇のワークショップを受けて、おばあちゃんと一緒に驚いてあげる。「え、ないんですか？　一緒に探しましょう」と言って一緒に七転八倒して探し出す。そうやっていくと病人にも介護従事者にもストレスがなくなるということで、病人の家族の方にも演劇ワークショップを受けてもらっています。

岡山の菅原君は、在宅で認知症を介護している高齢者たちと一緒に「認知症徘徊（はいかい）演劇」を結成していて、とても好評なんです。いまでは奈義町が彼に目をつけて、アートデザインディレクターとして採用しています。

――地方ではこの時代ならではの面白い取り組みが始まっていますね。

藻谷　実にその通りで、「経済成長できないと日本はおしまいだ」と悲観している人は、先祖の培った非常に豊かな農と食の基盤を持つ地方の可能性を、あまりにも知らないのです。

人間の頭の中は、なかなか時代に追いつかない。ヒトラーは、ドイツに工業化の道筋をつけておきながら、スラブ民族の土地を奪って食料を生産しないと将来はないという強迫観念に囚（とら）われ、自滅しました。「経済成長しないと中国に侵略される」なんて妄想に駆られている人を見ると、「ヒトラーここに再臨」という感じがします。

「おらが町も東京化しないと生きていけない」といまだに思い込んでいる地方の高齢者も、罪はないが似たようなもの。地方の方が、自然エネルギーの活用でエネルギー自給率を高められるし、人口減で余る開発地を農地に戻せば食糧自給率も高まる。もう第二次大戦までのような、他国を蹴落とさないと自分が生きていけない時代ではないんです。

平田　地方自治体でも持続可能な町と危ない町が出てきていますが、ぼくが多くの地方の人に言いたいのは、とにかくセンスの良い首長を選ぶこと。そして多少、我田引水ですが、演劇教育を広めてコミュニケーション能力を持った若者を育てること。そうすれば結婚して子どもを産んでくれる可能性が広がります。うちの劇団は団員の子どもが40人いて小劇場界最大です。役者たちは貧乏だけど、ベビーカーなんて3、4代引き継いでシェアしている。ここ二十数年で銀行の名前はころころ変わりましたが、劇団青年団はもう30年不変です。続けばいいってもんでもありませんが（笑）。

地域コンサルタント、芸術家、デュアルライフ（都市と田舎暮らし）実践者。
分野は違っても、時代観、生き方、価値観は共感する部分が多い

こうさか・まさる　1970年生まれ。30歳で大手企業を退社し、一人で営むOrganic Bar「たまにはTSUKIでも眺めましょ」を13年前に開店。現在は週休３日で東京都と千葉県匝瑳市の２拠点生活。NPO法人SOSA PROJECTを創設し、「自給、自立、自信」をテーマに米と大豆の自給、移住者の支援活動などを行う。著書に『減速して自由に生きる　ダウンシフターズ』『次の時代を、先に生きる。』

こうやま・のりお　ノンフィクション作家。1960年、埼玉県生まれ、信州大卒。2014年、「佐村河内事件」報道で第45回大宅壮一ノンフィクション賞（雑誌部門）受賞。近著に『下山の時代を生きる』（平凡社新書、企画構成）など。こうやまのりお名義で児童書も執筆、『ヒット商品研究